



TITLE:

自作の反射望遠鏡について : 承前

AUTHOR(S):

中村, 要

---

CITATION:

中村, 要. 自作の反射望遠鏡について : 承前. 天界 1926, 6(69): 540-541

ISSUE DATE:

1926-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160595>

RIGHT:

## 自作の反射望遠鏡について (承前)

中 村 要

大阪の植村氏のスレード六時半鏡のマウンティング製作に際し同時に神奈川の近藤氏のものも製作され八月に至つて再度前回製作の経験上著しく改良をして寫眞の如きものが出来上つた。此の詳細は同好者の参考になる事と思ふ。完全なるマウンティングとしてはこれが最初のものと思ふ。

マウンティングの型式は素人用の経緯臺で外形としては英國標準型を採り、米ブラシアー、英カルダー、アーギンク等の長所を参照して設計したもので重要な鏡の取付け其他には充分の注意を拂つて居る。マウンティングは三脚蓋を除いて總て金屬製で水平高度兩方向の微動整置、拋物線鏡、平面鏡の完備せる修正整置を具え、接眼レンズはネジ運動が付いて居る。

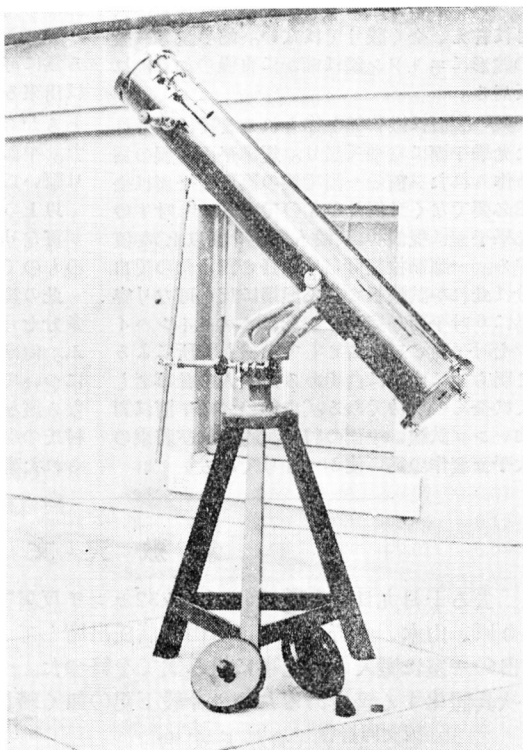
正規の附屬品としては口径一吋倍率六倍のファインダーと接眼レンズは三個であり倍率は焦點48吋の鏡で18ミリ67倍、12.5ミリ96倍、6ミリ200倍のもので、日本光學工業會社の製品で同社より現在は9ミリまでより作られてないが同社の五藤氏の盡力により正式のファインダー及び6ミリ接眼レンズが近く作られる事になつて居る。接眼レンズ三個で約30圓である。接眼レンズは色消しの高級なものであり輸入品に優るものである。

鏡は自作の六吋のもので近藤氏のもの、結果は以下の如きものである。二重星の極度の分離試験では200倍で六吋の最も都合よき試験星である牧夫座 $\delta$ 距離0.8秒の連星は圓盤像が見事に並んだものに見え140倍で等星は美事なる四重星に見え12日の月夜充分に北極星の伴星を認める事が出来た。土星の輪のカシニ溝、クレープ輪、土星本體の帶等明瞭に見え、木星衛星の直徑の差を充分に

認める事が出来、月火口のがフセンザ火口の裂け目等、六吋口径として充分なる結果を挙げた。

マウンティングのみの値は、附屬品の總てを含んだ完全な望遠鏡としての値は約220圓

自作の反射望遠鏡



で素人用として高價ではあるが六吋といふ口径と設備とを考へれば止むを得ない事と思ふ。同等以上の實力の無い英國製の輸入品に比し半値であり、接眼レンズ一箇、ファインダー無しに貧弱なる3吋屈折の300圓に比し著しく廉價である。4吋半の同構造のものほすでに着手されて居るが大體四分ノ三の價格で出来る事と思ふ。5吋のものも製作準備

がされて居る。

此の反射望遠鏡は硝子材を除いて純日本製で全く實費で作られるものであつて、今後眞面目なる素人の研究用として不十分ながら提供する事が出来ると思ふ。反射望遠鏡の現在素人に珍らしいのは反射望遠鏡が現在余り知られないのを作る所が無い爲である。反射鏡用の拋物線鏡及平面は幸ひ自分の手で輸入する必要なきかなりの程度の作る事が出来自分は勞力多き鏡製作に餘り多くの時間を費し得ないが西村製作所の助力により眞面目な良き且つ廉き反射望遠鏡の普及には勞力を惜しまぬものである。鏡及びマウンティングも主義として此れより低級なるものを作る考えはない。鏡は眼視用として F8乃至 F9のものとする考である。現在十八號を作業中である。

六時の口径は反射望遠鏡として最も取扱易き限度で椅子に座し常に水平に覗きながら長時間の連続観測をなし得る點等は屈折の比較すべき處でない。

最初の六時と同時に神戸のスコフィールド氏

の依頼により特殊なる反射望遠鏡が作られた。此れは同氏の大陽紅焰觀測及び旅行用として計畫されたものは同氏の八時半カルヴァーの上部に取付けられ使用されて居る。同氏使用の分光器の大きさより焦點距離が制限され約80吋弱の豫定で29吋に完成した口径は11センチ4 $\frac{1}{2}$ 吋の短焦點のものである。同氏の通信による自分の心配に反して可なり良好なる結果を挙げ神戸にて八時の使用を許さざるシーイング悪き夜155倍も使用して八時半に優る結果を挙げ土星像も良好きの事である。又最初計畫されたる大陽紅焰觀測にも好成績を得て居るの事である。

尙ほ詳細に關しては直接照會されたい。寫眞入用者は手札板代として八錢封入の事。

マウンティングは其後著しき改良を行ひ、鏡セルはアルミニウムの使用等最新の構造となり、第十號まで豫約済みである。器械部や光學部分に於て英國標準型のものに劣つて居ない。(十月十三日)

## 記念すべき三つの新しき小遊星の命名

第十九世紀の初めから発見が引き續きつゝある小遊星は、一昨1924年の申頃、既に一千個以上の記録に上つた。此の程、此れ等の新しい小遊星の或るものに、慣例により、初めの発見者から名が與へられたが、其のうち、

第1000番の小遊星(假名1923NZ)には Piazzia (ピ ア ジ ア)

第1001番 (同 1923OA) Gaussia (ガ ウ シ ア)

第1002番 (同 1923OB) Olbersia (オルバシア)

さういふ名が與へられた由ナハリヒテン誌第5454號で公表された。命名者、即ち此等の星の発見者は其れぞれ K. Reinmuth (ラインムット)、S. Beljowski (ベリヤウスキ)、V. Arbizky (アルビツキ) 三氏である。

上記の三氏が此の三つの小遊星に此うした名を與へたのは誠に好い思ひ付きである。人の既に知る如く、Piazzia (ピアジ) は、1801年 1月 1日の夜、イタリヤ國のパレルモ天文台に於いて、小遊星第一號を発見した天文家であつた。又、Gauss (ガウス) は、當時ドイツ國の田舎に生ひ立つた數學好きの一青年であつたが、Piazzia が突然の病氣のため觀測不能となり、遂に此の小遊星の行くへを見失つた時、數理の力によつて星の軌道を算出し、其の軌道要素を基として此の星の將來の位置を豫言した。此の豫言に導かれて Olbers (オルバース) は此の見失はれた星を見付け出し、こゝに學界の不安失望を一掃したのであつた。Piazzia の勤勉、Gauss の天才、Olbers の熱心が續りなされて、第一號小遊星 Ceres (セレス) は確認せられ、其の後に續く幾千個の同類星の首位に置かれることとなつた。

この美しいエピソードを永久に記念するため、今の世の學界が、數もめでたい第一千番と第一千一番と第一千二番の新小遊星に、慣例上、女性化した此れ等の名を認めるに至つたのである。